

余 録

石 垣 健 一

は じ め に

この記念号に何か書きませんかというお誘いを受けて、私がこれまでの研究生活で深い影響や適切なアドバイスをしていただいた恩師、先輩、同輩、友人の方々、とくにこの記念号へ玉稿をお寄せいただいた方々や記念号発行についてお世話いただいた人々との思い出を中心に研究生活をふりかえってみたい。

出 生

1943年（昭和18年）1月19日旧満州吉林省で、父田中大四郎、母智子の長男として生まれる。父は熊本県上益城郡益城町の農家に名前の示すように大正4年に生まれ、熊本商業を卒業後旧日本窒素（株）に入社し、朝鮮の興南工場で勤務していた。母智子は大分県西国東郡高田町（現豊後高田市）の薬種商石垣家の長女として生まれた。高田高等女学校を卒業後、東京に出た後、日本窒素に入社し興南工場に勤務した。両親の出会いはこの興南工場でのことであり、いわば職場結婚であった。結婚後興南工場から旧満州（現中国東北部）の吉林に転勤になり、そこで私が生まれた。小柄な赤ん坊であったようだが、担当の産婦人科医が「小さいが、元気にそだちますよ」と言われたことを母が後日時々話してくれたことを覚えている。

父大四郎は、私が生まれて間もない3月1日に事故で突然亡くなった。この

世での父親との関係はわずか40日あまりであった。事故の原因について成長した後になって一度聞いたことがあったが、出来たことはできたことであり、その後、このことについてお互いに話をすることはなかった。

しかし父の死は後の私の人生に大きな影響を与えずにはおかなかった。父は間もなく満州の北部奥地（中国黒龍省）に転勤の予定になっており、生きていれば任地先はソビエト国境近くであり、第2次大戦終戦間際のソ連軍の満州侵攻によって一家は大きな打撃を受けたことであろう。幸か不幸か父の死でそのような危機を免れ、終戦以前に母の故郷、高田に帰国することができた。また終戦後の引き揚げであれば、あの当時の困難と混乱を思えば、どんなことになっていたかを想像することは難しくない。ともかく人生のスタートはこのような事情によって高田で幼少、少年時代を過ごすこととなった。

高田での生活

母と私は母方の祖母のもとで暮らすことになった。石垣家は薬種商を営んでいたが、祖父は戦争中に他界して、祖母、長男（叔父）、母、私の4人暮らしであった。母には妹がいて戦前は結婚して朝鮮半島で暮らしていたが、終戦後朝鮮からの引き揚げで苦勞し帰国後間もなく亡くなった。暮らし向きは戦後まもなくでもあり、日本人みんなが貧しく、しかも九州の田舎町の小さな商家であったので、一家4人の生活はつましいものであったと思われる。それでも幼かったせいでもあろうが特に日頃の生活に不自由した記憶はない。小学校時代クラスメート約50名中15%程度は戦争の結果片親であったように記憶している。戸籍上は母1人子1人の母子家庭であっても実際は祖母、叔父、母と私の4人家族であり、ほかの家庭も似たり寄ったりであったので、その事を特に意識することはなかった。貧しいことが普通の時代であった。

1949年（昭和24年）4月に高田小学校に入学した。残念ながらその頃の記憶はあまりないが、ただ1年生の2学期の通信簿に関することは断片的に覚えている。通信簿を受け取り、「大変良い」の数を数えたら1学期のそれよりも大

幅に増えているので、喜び勇んで駆け戻って母に見せたら母はむしろ気落ちした様子であった。よく調べると実際は「大変良い」が4から3に減少していたのだが、1学期と2学期の結果を合計しそれが7に増えたと誤解したのである。

このころのもう一つの思い出は小学校3年のころのものである。字の書き方が乱暴で下手で先生を困らせていたが、なにかの加減で少し丁寧に書くようにしたら、担任の先生にやればできないではないかと大変褒められた。それ以後国語はもちろん他の勉強にもはげみになったように思う。教育の要諦の一つは欠点の指摘よりも長所（努力の成果）を評価することである。子供心にもその時のことが強く印象に残っている。小学校5年、6年の担当は大波多正信先生であった。若くて情熱に燃えている先生であった。クラスをいくつかの班に分けて各自に役割を与えて責任をもって行動するように指導された。友達と草野球を楽しんだ。グローブが欲しくてほしくて母に頼んだが、聞き入れてもらえず、友人がカバヤキャラメルの景品（彼は商店の息子だった）を手に入れてくれた。豚皮のギャバギャバのグローブだったが、布製のそれよりもいいやと自分を納得させた。

高田中学時代はテニス部に入った。1年生の時は例によって球ひろい、素振りの毎日だった。たまに球を打つてもとんでもない方向に行ってしまうので、これまた球ひろい。しかしテニス部で幾人かの友人を作ることができた。井上宣英君はその1人である。彼はテニス部の顧問の井上平先生の息子だったので、学校だけでなく自宅に伺って様々なこと、例えば過去の教え子達がいかに立派になっているかなどを教えていただいたりして励まされた。練習の甲斐あって中学3年生の時には豊後高田市の代表3組の中の1組として大分県大会に出場した。順調に準々決勝に駒を進め、先鋒として平山（後衛）・石垣（前衛）ペアが出場し、あと1点をとられれば負けというところまで追い詰められたが、ここから逆転して勝利を収めた。結局は他の2組が善戦むなしく敗れたためにテニスの時代は終わりを告げた。それはまた楽しい中学時代の終わりでもあった。

1957年（昭和32年）大分県立高田高校に入学した。普通課程と商業課程からなるごく普通の地方の高校であるが、普通課程の学生の多くは進学を目指していた。私もその流れの中にいた1人であった。特にクラブ活動にも参加しないで、受験勉強に励んでいた。昨年古希を迎えるということで、高校時代の同窓会を開いた。50年ぶりの再会で盛り上がったが、その時に聞いた話では「石垣さんは『昼休み中も席で本を読んでいる』というイメージでした」といわれて、なんという寂しい高校時代だっただろうと再認識した次第である。あのころの思い出は小津安二郎の映画と高田高校野球部の活躍だけである。田舎の弱小野球部の活躍である。3年生の時には県大会で優勝し、中九州大会で熊本県代表校と戦い（当時は現在と違って各県1高ではなく複数県代表が出場決定戦をした）、甲子園への夢は断られた。その過程で私も大分県営球場に駆け付けて応援した。しかし卒業の翌年、門岡（元中日ドラゴンズ投手）を擁して甲子園初出場を果たした。残念なことに当時私は神戸でなくて山口にいたので甲子園には縁がなかった。高校時代に1年生の担任であった稲葉武夫先生には在学中を通じて常に気をかけていただいた。道を外さないようにという心配りをいただいたことをよく覚えている。

山口大学経済学部の学生時代

経済学を学びはじめたのは1960年（昭和35年）4月に山口大学経済学部に入學してからである。前半2年間の教養課程を終了して安部一成先生のゼミに参加させてもらった。当時先生は40歳前後で新進気鋭の学者であると同時に原水爆禁止運動にも積極的に参加しておられた。「行動的アカデミズム」を旗印に、学内外でゼミ活動を行った。夏には洞春寺での『金融資本論』の読書会、春夏のソフトボール大会への参加、クリスマスのダンスパーティー、洞春寺近くの先生宅での新年会など忘れられない思い出を残してくれた。安部先生は原水爆禁止運動がいわゆる「いかなる国の原水爆禁止問題」をめぐる分裂をし、活動が停滞した時期に、無党派的立場にたって「原水爆禁止平和大行進」をみず

から組織し、「広島—下関」間を独力で歩きとうされた。ゼミ生の多くも部分的にこれに参加したが、小生は防府から山口まで先生にご一緒させていただいた。先生は被爆者のための施設「湯田苑」の設立に尽力された。

先生のご専門は経済成長論、寡占論、日本経済論などであり、多くの著書・論文を残された。先生の論点は時代の推移とともに変わっていったと思うが、少なくとも私が直接指導を受けた時代での1つの論点は寡占問題におかれていたように思う。寡占（あるいは大企業）が日本経済の成長を促進するやいなや、あるいはそのことが中小企業や働く人々の経営や生活にいかなる影響を与えるかどうかであった。

幼稚で頼りない学生であった小生にとっては先生の提起された問題に答えるすべはもちろんなかったが、先生が理論を考えると、常に現実とのすり合わせなしの抽象的論議に終わることのないようにされていた。この点は先生から影響を受けている。先生からの忘れがたい思い出の一つは、4年生当時、就職活動に悩んでいたときに大学院進学を勧めていただいたことである。当時自信喪失気味であった私を先生は励まし、新しい進路を示唆して下さった。先生のこの励ましがなければ私の人生行路は大きく変わっていたであろう。

神戸大学大学院時代

1965年（昭和40年）4月神戸大学大学院経済学研究科に入学した。専攻は金融論で矢尾次郎先生のゼミナールに所属した。矢尾先生は貨幣的経済理論の専門家の間で優れた研究者として尊敬されていた。とくに名著『貨幣的経済理論の基本問題』はウィクセル以降の貨幣的経済理論の展開を貨幣経済の把握方法および貨幣作用の分析という二つの観点からとりあげたものであり、貨幣数量説との対比のもとに、ウィクセルからケインズの『一般理論』にいたる理論の展開を上記の観点から分析し、貨幣作用の内容・経路・根拠を明らかにしたものであった。大学院のゼミは先生の研究室で二人だけでケインズの『貨幣論』を読み、報告し、討議する形で進められた。『一般理論』については主として

自主的に研究を進めた。先生のこの著書を手引きとして、刊行以後の新しい理論的展開を一部加筆して『金融的要因と有効需要』を修士論文として提出した。当時は現在ほどには新しい雑誌論文中心の研究ではなく、いわゆる古典といわれる著書を読み込むことも重要視されていたように思う。『資本論』、『一般理論』、『利子と物価』などの古典が繰り返し読まれていたように思われる。現在のようにいわゆる業績主義にもとづく短期的評価が時流となっている時代ではいたしかたないのかもしれないけれども、すぐに結果がともなわなくとも本質的で重要な問題を深く考察することによって、長い目でみて意味のあることもあるのであるから（もちろんこれは怠け者の言い訳にもなる恐れもあるけれども）、長期的なものの見方や歴史の流れにもう少し注意が払われるべきだと思う。

第2ゼミとして新野幸次郎先生のゼミにも参加させていただいた。産業構造論や寡占論がテーマで取り上げられることが多く、かならずしもわたしの専攻分野に近いわけではなかったが、参加者が多く、個人報告が中心であったため、討議が活発に行われた。新野先生は報告を注意深く聞き、最後に報告の不十分であるところをもう一度チェックするようにアドバイスされるのが、常であった。また研究者の態度として自己抑制的であることの重要性を強調された。適切な例ではないが、ゼミのコンパが始まる前に、時々『酒は飲んでもよいが、飲まれてならぬ』と言われた。のん兵衛の友人と目を合わせて下を向いた覚えがある。その夜コンパ終了後、帰宅の途中に先生宅に伺い、高級ウイスキーをいただいて帰った。

則武保夫先生のゼミではシュタインドル著『アメリカ資本主義の成熟と停滞』を読んだ。この本は大学の卒論を書くときに参照したので、ぜひ参加させてほしいとお願いして参加させていただいた。このゼミには学生の他に幾人かの先生方も参加されていた。経営学部の松田和久先生、当時神戸商科大学におられた三木谷良一先生、経済学部の足立英之先生などが喧々諤々の討論を重ねられた。則武先生は泰然自若として議論の取りまとめをされていた。この研究会で

初めて三木谷先生とお会いし、アメリカでの新しい経済学の動向などについて親しく教えていただいた。また足立先生は新庄浩二さん達とともに経済学部に残られて間もなくのころで、大学院生にとって見習うべき先輩として、またいずれアメリカの大学に留学が予定されている研究者であった。これらの先生方との研究討議は大学院レベルでの研究の在り方や研究方法について多くの示唆を与えられた。ゼミ終了後は六甲あたりで、夜のゼミと称して『人生』や『お酒』の楽しみ方についても教えていただいた。

大学院時代にはゼミの他に、金融論を専門とする比較的若い研究者との研究会に参加した。その1つはMME（Modern Monetary Economics）研究会である。この研究会は三木谷先生を中心とする神戸近辺の若手研究者が外国雑誌論文の紹介や個人研究の報告を行うためのものであった。ここでは欧米の新しい研究動向について情報交換し、また金融学会の予備報告などに役立った。この研究会は現在もなお引き続き行われているようである。

大学院のクラスメートで『若竹英数塾』でバイトしていた元木久君（現関西大学名誉教授）を中心にして数学の研究会を行った。線形代数を中心に勉強した。元木君が先生役で、数学があまり得意でなかった私にとって有難い研究会であった。

MME研究会やシュタインドルの研究会を通じて研究指導をしていただいた三木谷先生の紹介をいただいて神戸商科大学に助手として採用されることになり、1968年（昭和43年）9月末日に博士課程を中退した。在学期間は3年半であったが、恩師、先輩、同輩の方々にお世話になり、研究上のことはいうまでもなく、人生についても貴重な教訓をいただいた。この時期の経験が私の礎となっている。

神戸商科大学時代

神戸商科大学に赴任したころは大学を取り巻く情勢は緊迫の状態を強めつつあった。1968年から69年にかけて東京大学や日本大学など東京近辺で大学当局

と学生たちとの衝突が繰り返され、大学封鎖が頻発した。いずれ関西にそして神戸商科大学にも波及してくることになるのであるが、このことについてはあとでふれることにしたい。当時の商大は垂水の丘の上の星陵台にあり、商経学部だけの単科大学であった。経済、経営、管理の3学科からなり、教員数100名程度、学生数は2000人たらずの小規模大学であった。教員の質からいえば周辺の有名大学をしのぐといわれていた。とくに経済系には当時の若手教授、助教授に多彩な先生方がおられた。伊賀隆、能勢哲也、三木谷良一、村田安男、二木雄策、大林信治先生などがおられて、きわめてアカデミックな雰囲気を作り出していた。加えて講師・助手レベルで同世代の多くの人材が集められた。山本有造、川鍋襄、菊本義治、林敏彦、片山誠一、江川育志などの諸氏である。これらの諸先生方の中で、本格的な研究者としての仕事をはじめられたのは今から思えば幸運であった。

三木谷先生を別にすれば、二木先生に学問上、正確に言えば、学問研究する上での基本的姿勢についてもっとも影響を受けた。隣の先生の研究室に伺っては馬鹿な質問をして先生の研究の邪魔をしてしまったが、そのような中で、先生は、時流に乗った研究や理論について一定の距離をおいて、それらの研究の基礎にある前提や仮定について深く考察を行い、たとえそれが主流の理論や考え方であったとしても捨てるべきものは捨て、自己の研究を進めるという姿勢を堅持されていた。今になって振り返ってみると、このような研究姿勢を自分が持続し、十分な成果を上げてきたとはとても言えないけれどもその痕跡の欠片の一つでも引き継いでいれればと思う。

その頃の私の研究上の関心は大学院時代の延長線上にあった。貨幣・金融的要素が有効需要にどのような経路を経て波及作用するかであった。特に金融当局の政策行動が不完全競争市場のもとでの金融機関の、特に利率と資金供給量（資金のアヴェイラビリティ）にいかに関与し、有効需要に影響を与えるかの問題である。銀行の行動というマイクロ分析を有効需要というマクロ分析に結び付ける研究である。後日ノーベル経済学賞をもらうことになるスティグリッ

ツ教授などの研究を中心に進めたが、しかし金融のミクロ分析は次第に私にとっては高度な数学的手法に精通することを要求するように思われ、一種の研究上の制約が課されることになった。さらに、さきにふれた大学紛争は商大にも及び、大学本館が封鎖された。学生・教員間にも亀裂が走り、大学の雰囲気はとげとげしいものとなってしまった。しかし在學生たちが卒業し、新入生がとってかわるようになり、また赤軍派の浅間山荘事件を最後として、大学も社会も落ち着きをとりもどした。この大学紛争は一面では大学の在り方や研究者の在り方について鋭い問題提起を含んでいたため、表面上は解決済みになっても、精神的にいろいろな影響を残してしまった。地道な学問研究よりも「何のための学問か」といった哲学的かつ方法論的な問題が重要であるというある種の時代の風潮があり、当時の私はその風潮に流されてしまい、研究者としてスランプ状態に陥ってしまっていた（一流打者にはスランプがあるが二流以下にはそれはないということからすれば、私はただ怠けていたに過ぎなかったのかも知れない）。本来なら最も生産性の高いこの時期に発表した研究論文数は限られたものでしかなかった。

この間、矢尾先生のすすめもあって藤田正寛教授、三木谷教授とともにB. H. ベックハルト『連邦準備制度』の翻訳に加わらせていただき、六甲台の先生の研究室で翻訳原稿を報告検討し、約4年間かけて仕上げたのがこの時期の主な仕事となった。

この仕事の終わるころ藤田先生から神戸大学経済経営研究所への移籍のお話をいただいた。当初は『国際資金』講座へという話であったが、最終的には新設される『オセアニア経済論』にという提案に代わっていた。まったくの新分野であり、専門外の分野でもあったので、ずいぶん悩み、人にも相談したが、最終的には矢尾先生の当面は金融的側面からオーストラリア経済の分析を始めようというアドバイスを従って神戸大学へ移ることにした。

その頃には助教授として自分のゼミナールを待っていた。ゼミの学生数は1学年10名程度で、3年生ゼミでは本の輪読と報告、4年生ゼミは卒業論文の作

余 録

成のための指導を行った。なぜか第1回のゼミ生の成績は概して良く、スポーツ好きが多くて、自分も若かったので楽しいゼミであった。時にはゼミ時間に菊本ゼミとソフトボール対抗戦を行い、たいがい勝って相手を悔しがらせた。菊本義治神戸商科大学名誉教授は大学院時代からの友人で、われわれ同学年のリーダー的存在であった。現在はリハビリに励んでいるにもかかわらずこの記念号にご寄稿いただいた。3年間の短い間のゼミナール指導に過ぎなかったが、教育の楽しさを垣間見させていただいた時間であった。ただ移籍の時期が10月であったために、3年生のゼミ生には中途半端な状態にしてしまうことになり、誠に申し訳なかったと今でも思っている。片山誠一先生が後を引き継いで指導していただいたのは幸いであった。

神戸大学経済経営研究所時代

1978年（昭和53年）10月、神戸大学経済経営研究所に助教授として赴任した。研究所は10講座から構成され、研究スタッフは30数名であった。オセアニア部門は1977年4月に新設された一番新しい部門で、佐々木誠治教授が兼任教授としておられ、半年前に下村和雄助手が任用されていた。とりあえず研究計画として戦後のオーストラリア経済をマクロ経済政策の展開で跡付けること、同時並行的に金融構造と金融市場の分析を行うことにした。当時研究所にはオセアニア関係の本、資料等は比較的多くあったが、研究に直接関連するものは少なく、研究も手探り状態で進めざるを得なかった。そしてなによりも現地を見て、オーストラリアの国民、政治、社会、文化などを直に知ることが必要不可欠であった。1980年にキャンベラにあるオーストラリア国立大学（ANU）の日豪研究センターに客員研究員として働く機会を与えられた。オーストラリアは自然環境や気候条件が日本とまったく異なっているのは当然であったが、国の成立が1788年にイギリスからの囚人による植民地として始まったこともあり、当初はもっぱらイギリスからの移民が主流であった。しかし次第に他のヨーロッパ諸国、中東諸国、アジア諸国の人々の移民も増え、いわゆる白豪主義の国か

ら多文化・多民族国家に変わりつつあった。私と家族は大学所有の家屋に住んでいたが、近所の人は大学関係者ではなく普通の市民で、様々な国からの移民であった。イギリス、ギリシャ、マレーシア、ビルマ（現ミャンマー）などであり、職業もまことに種々雑多であった。人間はもちろん外国からの商品や資本についても日本のように対外アレルギーがない国であり、豊かで開放的なお国柄であった。特に当時日本とオーストラリアとの経済的関係は相互依存を強めており、かつきわめて重要であった。日本の高度経済成長を支えた鉄鉱石や石炭などの原材料供給基地としてのオーストラリアの重要性に加えて、日本から自動車や電気製品などの工業製品の輸出も増加し続けていた。

しかし豪州経済は当時深刻な状態にあった。1960年代は欧米諸国と同様に経済は低インフレ、低失業で、安定しており、1人当たり国民所得はOECD諸国の中のトップクラスであった。しかし70年代には深刻な「スタグフレーション」が生じ、それが長く続いていた。日本の場合にも同じ状態が発生したが、原因は石油危機にあった。しかし豪州では労働市場の硬直性すなわち労働組合主導による賃金上昇がその原因であるとされた。労働市場に限らず金融市場もまた様々な規制が課せられており、為替レートも金利も自由に市場で決定されていなかった。豪州経済を再活性化するためにどのような政策をとるべきなのかが時代的課題として取り上げられようとしていた。私の研究もこれを中心課題として進めることになった。

2度に亘る日豪研究センターでの研究において2人の先生に公私ともにお世話になった。S. クローカー教授は日本経済史の専門家で、日本についての広く深い知識を持ち、読み書きは勿論、見事な会話力をお持ちであった。研究所にも在籍しておられたので、私がANUに行ったときには実質的な身元引受人としてお世話になった。豪日研究センター所長のP. ドライスデール教授は国際貿易論の著名な研究者であるが、大学院時代に一橋大学に留学されて日豪間の貿易関係について学ばれた経験もあって、日豪経済関係研究について第1人者であっただけではなくて環太平洋経済圏の提唱者・推進者の1人として国際

的に活躍された。この構想は後に APEC として組織化され、さらに環太平洋諸国間の経済連携協定である TPP として結実しようとしている。研究が象牙の塔の中だけでなく世の中の変革の推進力となり得ることを実証された。両先生とも多くの日本の学術機関や実業界との関係が深かったが、神戸大学、特に研究所との研究交流に熱心で、数度にわたる国際共同研究を進めることができた。その後の数度にわたる短期の研究や調査のための出張も含めた研究交流が、博士論文『オーストラリアの金融システムと金融政策』に結び付いた。

研究所時代公私ともにもっともお世話になった先生は藤田先生である。新庄博先生門下生の1人として大学に残られ、国際金融論、国際資金論を専攻され、『国際流動性と低開発国』で学位を取られた。先生は個別研究が主流であった時代から共同研究の重要性を常に強調されていた。それは研究所の組織面では講座制から大部門制への移行の実現であり、共同研究では、国内外との共同研究の推進として結実した。私はその手助けをさせていただいたが、先生を主査とする科研プロジェクト「邦銀の国際化の現状と課題」でのアンケート調査、ヒヤリング、そしてオーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、香港においての邦銀の国際化の調査などで成果をあげられた。先生はまた田中金司、新庄博先生を中心に創設された神戸大学金融研究会の幹事役を引き継ぎ、商大、関学、同志社などの近隣大学、銀行エコノミストたちとの研究交流を積極的に行われた。この研究会はその後三木谷先生、石垣、藤田誠一教授、地主敏樹教授、宮尾龍蔵教授に引き継がれ、これまでに500回を超えて開催されており、過去にはフリードマン、ハイエク、ルーカスをはじめ内外の著名な研究者が研究報告を行っている。

1987年（昭和62年）教授に就任した。その時期には下村助教授はすでに他部門に移籍していた。下村さんとは1980年ごろオーストラリアに同時に滞在していたことがあった。彼はシドニーのNSW大学でケンブ教授の下でPh. D. 取得のための研究をすすめており、私はキャンベラにいた。休暇を利用して、おんぼろ自動車（彼はその愛車をold ladyと呼んでいた）で自宅まで訪ねてくれた

ことがあった。冬の暖房は薪ストーブにたよっていたために丸太を割る必要があった。剣道部出身で腕に覚えありとのことで、薪割りを助けてくれた。その時の写真では、なかなかの腰がまえである。現地調査にニュージーランドに行く計画をたてた。もちろん貧乏旅行である。値段の安さに惹かれて個人所有のレンタカーを利用することにして南島を1周することにした。平野をすぎ山道にはいると小雪交じりの天候にかわった。峠に差し掛かった時、道の山側には雪がたまっており、左側は絶壁である。下りに入った時、彼はブレーキを踏んだ。古いタイヤであったこともあり、そして彼は雪の降らないオーストラリアで免許をとったばかりであった。車はスピンを何度か繰り返して山側の雪の中に突っ込んで止まった。九死に一生をえた。その旅行のもう一つのエピソードで、その古い車が走行中に煙を噴き出した。ファンベルトの切断である。農村地帯であったが、遠くに農家が見えるだけである。彼がその農家について15歳ぐらいの若い青年を連れてきて、自動車を見てもらった。彼は応急措置をしてくれて2、3キロ先の修理工場を教えてくれた。謝礼を上げようとしても決して受け取ろうとしなかった。その青年の純朴な人柄とともに、田舎で生きてゆくためには少々ことは自分で処理できる力を持っていることに感心させられた。我々にとってのこの旅行の教訓は、安全には金を惜しむなということである。下村さんは国際経済学の理論家としてきわめて高い業績を上げられたが、数年前に亡くなられてしまった。残念の極みである。

研究分野の責任者である教授の一つの義務は部門の後継者を採用することである。これはなかなか困難で微妙な問題を含む。人事制度の在り方、研究者の能力の判定方法、研究態度と性格、年齢、採用時期の判断、研究人脈などの諸要因が絡んでくる。私の場合その選択は幸運であった。空席があった助手席に宮尾龍蔵君に来てもらうことにした。宮尾君は学部、大学院、ともに三木谷先生の指導を受けており私の授業にも出席していたので、能力、人柄についてよくわかっていたからである。すぐにハーバード大学のB. フリードマン教授のもとに留学し、学位をとって帰国した。その後も順調に業績を上げ、若くして

研究所長を務めた。彼は現在日本銀行政策審議委員の1人として日本の金融政策の策定と運営に参画している。

私は1996年（平成8年）4月から2年間研究所長を務めた。バブル経済の破綻により政府財政の悪化が急速に進んでいたために、大学および研究所の機構改革や再編問題が取り上げられていた。研究所としての1つの課題は、研究所と社会との結びつきの強化や研究上の国際交流の促進であった。

片山教授の協力を得て国際通貨基金（IMF）の要職にあった日野博之博士を1年間招聘して共同研究を実施した。日野さんは日本の大学卒業後、ロチェスター大学院で学位を取り、そのままIMFに就職して国際公務員としてキャリアを積まれた方である。日野さんと共同で研究を進め、その成果を国内外から報告者を招聘し、国際シンポジウム『日本の金融システムの再構築とグローバル経済』をポートピアホテルで開催し、500人以上の方が参加してくれた。日野さんはIMF退職後、研究所教授になられるとともに、ケニヤ政府顧問としても活躍されている。

研究所は、歴史的に旧制神戸商業大学の調査課を前身にしていることもあって、その母体であった経済、経営、法学部の先生方との交流が深かった。大学院、専攻分野の関係で経済学部の先生方との交流が特に密であった。三木谷先生とは最初にお会いしてからもう50年近くお世話になっている。神戸商大での助手の採用、MME研究会、神戸大学金融研究会、日本金融学会、神戸学院大学への再就職、などいつも私の前にいてアドバイスをいただいた。ときには厳しい叱責もいただいたが、そのことも含めて私の貴重な財産となっている。

足立英之先生は2学年ほど年長だが、大学院時代から経済理論では勿論のこと精神生活についても親しく教えていただいた。先生の考え方や知見を基準にして自分なりの見方や知識を検証するようになってきたように思う。このような交流はその後も続き、足立先生が経済学部長、私が研究所長の時期には経済学部と研究所の人事交流制度のあり方についてよく議論した。このような議論は正式の協議というよりも、会議終了後六甲道の安い寿司屋で、楽しく行った。

この構想は実を結ばなかったが、2人とも神戸大学を離れたあとも交流は続いている。足立先生のお弟子さんで、神戸学院大学に勤めている常廣泰貴、三宅敦史両氏を交えて経済学の中心問題である供給・需要・マーケットの3要因の関係について足立先生の最新の業績である『中期経済成長論』をとりあげて論争を楽しんでいる。

経済学部地主敏樹教授は少し年齢が離れているので、私の大学院時代の交流はない。しかし大学院三木谷ゼミの初期の時代のゼミ生で、すぐに三木谷先生の後継者として助手に残ったのでその頃からの知り合いである。間もなくハーバード大学のB.フリードマン教授のもとで学位を取られて帰国した。その時の人脈を生かしてフリードマン教授の著書や経済学教科書の代表格である、マンキュー著『マクロ経済学』の翻訳や『アメリカの金融政策—金融危機対応からニュー・エコノミーへ—』の著書を発表されている。金融分野の若手のリーダーとしてMME研究会、神戸大学金融研究会の世話役であり、現在では日本金融学会の常務理事として会長の藤原秀夫同志社大学教授を補佐して学会運営に尽力されている。地主さんは一橋大学との若手研究会を清水啓典さん（一橋大学名誉教授）や小川英治さん（一橋大学教授）とともにはじめ、両大学の若手関係者の研究の推進と交流を進めた。清水啓典さんとは若い時代から金融学会で交流を深め、三木谷会長の下で、1997年ごろ日銀法改正とともに汗を流した経験を持つ。清水さんは後に金融学会の会長を務められ、学会改革に道を作られた。

地主さんとの思い出は、数度にわたる海外学術調査である。豪州、NZ、マレーシア、タイ、ベトナム、スウェーデン、ドイツに出かけた。調査の目的は各国の金融政策の国際比較であるが、特にインフレ・ターゲティング政策の研究であった。各国中央銀行や銀行を訪問して質疑を相互に行ったが、彼は英語が達者で旅慣れていたので、物事を効率よくこなしていた。私はその反対であったために足手まといになったことをお詫びしておきたい。

研究所にいたので、学部教育には部分的にかかわっただけで、特に記すこと

もない。大学院教育については、専門分野の関係もあって少数の大学院生を送り出しただけである。ほとんどの人は修士課程を終えてから実業界に身を投じた。学者としての素養のあった人もいたが、大学院修了後の大学教員になることの難しさを考えると背中を押すのをためらわざるを得なかった。唯一博士課程に進学し、大学に運よく就職できたのが岩坪加紋君（摂南大学教授）である。彼はオーバードクター1年で努力のかいがあって学位論文を書き上げ、安居洋教授（神戸市外国語大学名誉教授）のお世話もあって岡山商科大学に籍を得ることができた。彼は博士課程の時代に阪神淡路大震災に遭遇した。JR六甲道駅の近くのアパートの2階に住んでいたが、床が抜けて1階に墜落した。運よく体には支障がなかった。運の良い人である。

神戸学院大学時代

三木谷先生のご推薦をいただき、2003年（平成15年）4月に神戸学院大学に移籍することができた。この時期関 助学部長、山上宏人教授に本当にお世話になった。山上さんは三木谷先生の大学院1期生で、私よりも4、5年後輩だが、若い時からMME研究会その他でよく交流があった。国際金融論専門家、ユーロ問題の専門家である。私の親しい友人で、この論文集の編集役の1人である。

私が移籍してすぐポートアイランドへの大学移転が問題になった。教職員集会などが、何回か開かれた。教員内部でもいろいろ意見があったが、最終的にはポートアイランドへの移転が決まった。この後神戸学院評議員2期、大学評議員1期務めたが、移転問題の決定後だったので大したこともできずに任期を終わった。

当時若い研究者が経済学部の内部で研究会を持っていた。その中心メンバーには、中村亨さん、伴ひかりさん、常廣さん、西山茂さん達があった。私もその研究会に入れてもらい、研究会終了後明石で、三宮で楽しい時を過ごさしていただいた。

本学に赴任し、有瀬キャンパスに研究室をいただき、教育に従事することになった。若くエネルギーにあふれているが、行儀がいいとはいえないがたい学生諸君に戸惑いを覚え、年甲斐もなく声を荒げることもあった。過去の研究を基にした授業内容が必ずしも学生諸君に伝わらないことや、学生の知的好奇心を掘り起こし持続させる難しさを感じさせられた。しかしポーアイ・キャンパスに移行後は学生諸君の受講態度は目に見えて改善しているように思われる。くわえて知的好奇心を持った学生がまだ数が少ないながら出てきているように思われる。

実を申せば、経済学部創立間もない1970年代の初め、最初のゼミを神戸学院大学で持たせてもらった。本務校（神戸商科大学）でゼミを持っていなかった時に非常勤でゼミを持ったわけである。そのときのゼミ生が数年前から同窓会を開いてくれるようになった。あの頼りなく思われたゼミ生諸氏が（実際は小生自身が頼りない若造だったが）60歳近くになり立派に人生を送られてきていることを知り、われわれが過ごしてきたこの時代と大学教育が間違いや無駄ではなかったと感じたのである。この10年間に知り合った学生諸君の10年、20年後の状況は、残り少ない時間しか残されていない小生には知りえないことだが、なにやらきな臭い時代雰囲気からして、『平和の時代』が維持され、若い皆さんが実りある人生を送られることを祈らずにはおれない。

今年（2013年）の5月ごろ思わぬ展開がありました。この『神戸学院経済学論集』を私の退職記念号として発行したいという旨の申し入れがありました。在職中にその話がなかったわけではありませんが、それには値しないからと固くお断りいたしました。定年退職後の気の抜けた状況と編集委員の山上、三宅さんの熱心な勧めもあって、「ではお願いいたします」となってしまうました。急な締め切りにもかかわらず玉稿をお寄せいただきました諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

最後になりますが、本稿執筆途中に逝去されました三木谷良一先生のご冥福

余 録

をこころからお祈りいたします。 合掌